

ONGAKU NO TOMO  
音楽の友

2008年8月号

Concert Reviews



東京ニューシティ管弦楽団

オーケストラ  
東京ニューシティ管弦  
楽団(第56回)

ここ数年、東京ニューシティ管弦楽団では音楽監督、内藤彰の提唱で、作品が書かれた時代に倣ったノン・ヴィブラート奏法を採用している。今回のメンデルスゾーンの「序曲(フインガルの洞窟)」と「交響曲第4番

「イタリア」、シヨバンの「ピアノ協奏曲第2番」もこの奏法で演奏され、楽譜も「フインガル」は第4版の最新校訂版が、シヨバンはナショナル・エディションが選択されて、ともにこの版での日本初演となった。現在の通常のオーケストラの音に馴染んだ耳にノン・ヴィブラート奏法はやや野性的に聴こえるが、「フインガル」では、その明晰な音と生命力あふれる表現が曲にマッチして、鮮やかな写実効果をあげていた。一弓一弓に波頭の碎け散る音、風の音が生き生きと宿っていたのである。シヨバンのソリストはナショナル・エディションの普及に貢献中の河合優子。オーケストラ提示部ほか随所に従来の版と異なる音が聴かれるが、そこに強い説得力が感じられて、河合の研究成果のほどがうかがわれた。演奏も情熱と確信に満ちたもの。ことに調子をあげたフィナーレでは曲の終わるのが惜しまれた。南国的色彩と明るい曲想満載の「イタリア」にもこの奏法は似合っていた。6月15日・東京オペラシティ ●萩谷由喜子